

書評 「死都日本」 石黒耀著

このニュースレターをお読みの多く方は、岩盤工学を専門とされている技術者であると思います。岩盤斜面や地下空洞の崩壊などについてのリスク評価を行っている方も多数居られることと思います。さて、岩盤工学とは少し離れてしましますが、近い分野として地震災害や火山噴火災害に関する分野があります。みなさんは、この地震災害と火山噴火災害のどちらに恐怖を感じられるでしょう？地震災害により大きな恐怖を感じられる方が多いのではないのでしょうか。私は火山噴火災害がとても怖い（火山地質を専攻したためかもしれませんが）。この違いは、私たち人間（特に日本人）は火山噴火よりも地震の経験が圧倒的に多いため、火山噴火災害の本質を知らないことが大きな原因と思われる。

この「死都日本」には、火山噴火災害の恐ろしさが非常に適切に描かれています。噴火が発生するまでの前兆現象の推移、水蒸気爆発から大規模な噴火への移行、そして主人公を襲う大規模火砕流の発生から移動・堆積現象のすべてが、科学的にほぼ正しく記載されており（時間的展開が速すぎるのは小説なので仕方ないところでしょうが）、火山の大規模噴火を擬似的に体験させてくれます。大規模噴火とは、決して1991年の雲仙普賢岳の「大規模火砕流」程度のものではなく、たとえば南九州に広く分布する「シラス」を1回の噴火で堆積させた（本当の）大規模火砕流の噴出などです。この「しらす」の噴火により南九州の縄文文化は壊滅し、またその際の火山灰は東北地方にも降り積もっています。「死都日本」では噴火災害のみならず、噴火後に発生する堆積した火山灰を起源とするラハール（火山泥流）災害も描かれています。さらに、この小説のひとつの大きな特徴として、噴火災害、ラハール災害、そして大規模噴火後に予想される長期的な異常気象とそれに伴う食料不足、政変におよぶ究極のリスクマネジメントを行う政治家を登場させていることです。

災害は一般的には規模が大きくなるほどその発生頻度は小さくなるといわれています。私たちは自然災害に関するリスクマネジメントを行う際に、どの程度まで「低頻度大規模災害」を考慮すべきなのでしょう。私はこの小説を読み、リスクマネジメント、特に「低頻度大規模災害」のリスクマネジメントに必要なことは、正確な科学的背景に基づいた知識と発生する現象を想像する力であると感じました。自然災害の知識を一般に啓蒙する手段として、科学的背景に基づいたこのような小説で疑似体験することが一つの有効な方法ではないのでしょうか。岩盤工学を広く一般に理解してもらうためにも、実際の事例をもとにした「読み物」が大切なのではないかと感じます。

この「死都日本」は出版後、火山学者の間で評判となり、火山学者、心理学者、行政担当者、報道関係者などを交えたシンポジウムが開催され、そこでの報告が月刊「地球」の特集号として出版されています。私は、この小説を一晩で読み、シンポジウムも聴視してしまいました。

（太田岳洋）